



今月のテーマ： 温暖化を始めとする環境政策の  
これまでとこれから

2026年1月 Vol.34 No.1

# 環境と文明

認定 NPO 法人 環境文明 21 会報



## 今度こそ、間違った選択をしないように！

藤村 コノエ

2026年の新しい年を皆さまはいかがお過ごしでしょうか。

トランプショックで始まった昨年は、その影響もあって、世界中の政治・経済が混乱し、戦争や紛争も続き、人類社会の不安定さが増した1年でした。またCO<sub>2</sub>排出量の増加が続き、世界の平均気温も上昇、各国で異常気象による豪雨、干ばつの被害も続出した1年でした。国内でも、政治は多党化し、円安・物価高騰など経済の不安定さが増した上に、一昨年以上の猛暑、豪雪、山火事を含む大火災など気象災害が各地で顕在化するなど、社会の持続性が危ぶまれ、それは年を越しても続いています。さらに、人類社会にどのような影響を及ぼすのか計り知れないAIが世界中を席卷する一方で、人類社会の存続に関わる気候変動の解決や日本の市民社会の強化などはなかなか進んでいません。

そうした中、環境文明21の役割も、社会の変革を促すという意味では、従来の活動を継続せざるを得ない面もありますが、新しい

動きに対応していく必要もあります。

そこで、新年に当たり、今年の活動も含めて私の思いを述べたいと思います。

### ○正しい情報を提供し続ける

ITやSNSの普及によりフェイクニュース（偽情報）が世界中に瞬時に広がるようになり、AIの進化により、それがより高度化・容易になったことで、本物との見分けがつかない偽情報が溢れています。温暖化についても偽情報が拡散され、真実を追求する科学者や真実を伝えようとする私たちNPOにとっても大きな問題です。

併せて、以前から指摘されていましたが、政府情報も「不都合な真実は公表しない」という傾向が続いています。例えば、昨年9月に特集した気候危機に対する国際司法裁判所による勧告的意見について、政府はほとんど報じていません。その理由として、勧告的意見では「国家は気候変動条約で合意したこと以上の、（人権など）慣習国際法などの下で

の義務を負う」と述べていますが、これは「気候政策は気候変動枠組み条約やパリ協定といった関連ルールを守っていればいい」と主張する日本政府にとっては“不都合な”ことです。また勧告的意見では、化石燃料発電への補助金などは国際的な不法行為と位置づけられた点なども、日本政府にとっては“不都合な真実”なわけです。そしてメディアもスポンサーや政権を気にしてか、気候変動の現象は報じても、その原因など本質を報じることはあまりありません。

そうした中で、まともな科学と人としての倫理に基づく「正しい」情報の提供に努めてきた当会の役割は、ますます重要になると思われます。先日の全国交流大会でも、「ここを見れば正しい情報を知ることができる、そんな環境文明であってほしい」とのご意見を頂きました。内閣府の世論調査でも、環境配慮行動が難しい理由として、「情報不足」(36.0%)、「環境情報の真偽がわからない」(22.3%)という結果です。

ただ、正しい情報か、本質的な情報かの見極めは益々難しくなることが予想され、それをクリアするには、これまでのように信頼できる人・組織(執筆して頂く)とのネットワークをさらに強化するなど、新たな手立ても必要になりそうです。

## ○本質的な議論を続ける

「現在の環境問題は文明の問題」との考え方のもと活動を続けてきた当会には、今年も本質的な議論を継続する役割があります。その一つとして、「まっとうな気候政策を」のメンバーを中心に、「現代社会は持続可能ではない」という考え方の下、真の持続可能な社会に転換するための方策について議論を始めたいです。このままの暮らしや経済活動を続ければ、気候危機はますます深刻化し、我々の暮らしや社会・経済、子供たちにも様々な悪影

響が及ぶことを、多角的な観点からエビデンスに基づく正しい情報を示し、それを何らかの政策に結びつける。うわべの持続可能性ではなく、真の持続可能な社会を探究し、その転換の一助にしたいと考えています。

政府は昨年5月に成立したAI法に基づき年末にその基本計画を発表しましたが、これは数年前に提唱した「Society5.0」(仮想空間と現実空間の融合により経済発展と社会的課題の解決を目指す社会)の実現にAIを活用しようというもののようです。一方で政府は、ウェルビーイング(身体的・精神的・社会的に満たされ、幸福感や生きがいを感じながら、持続的に良好な状態でいられること)の実現も推奨しています。世界で流行りの二つの言葉で示された社会像ですが、双方には大きな差があるように思えます。

人間の能力を超えたAIという「両刃の剣」に多くを委ね、地球の環境容量を超えた現在の持続不可能な社会経済活動を続けようとするのか(うわべの持続可能性の追求)?あるいは、人間であることを忘れずにその叡智を活かし、地球上の他の生命とも共生し、皆が安心・安全に心豊かに暮らせ、「善なる生」を可能とする社会を目指すのか(真の持続可能性の探求)?その分岐点に私たちは今また立たされているように思います。

およそ60年前、レイチェル・カーソンは著書『沈黙の春』(1962年)で「人類の分かれ道」を示したものの、私たち人間は間違った道、持続可能ではない道を選択し、その結果、今、様々な限界に突き当たっています。現政権は前者の道を推し進めようとしているようですし、戦争や争乱が続き、権力や財力に固執し、もっともとの欲望にかられる人たちを見ていると、またしても間違った選択をしそうな懸念も拭えません。それでも、今度こそ、間違った選択をしないよう、皆さんと共になんとか踏ん張りたいと思っています。